

子規の和歌・俳句と漢文學

仁 枝 忠

子規の漢文學に對する造詣は相當なもので、その文章を讀めば、如何に多くの漢文學の文獻を讀んでゐたかが想像せられる。しかし明治の教養ある人は皆さうであつて、子規のみの特異性と云ふことは出来ない。ただこれと彼の和歌・俳句が非常に關係を持つてゐたことに注意する必要があると考へられることである。そしてこれを少しく分析してみることが、即ち本稿の目的とするところである。

彼の年譜を繙いて見ると、早く六七才より漢文を學び、中學二年の頃には吟社を組織して鬪詩を行つてゐる。即ち彼の文學への關心は、先づ漢詩文によつて啓發せられたと見るべきであらう。後になつてからではあるが、特に本田種竹・國分青匡・桂湖村等の高名の詩人とも交り、多大の影響を受けたものと思はれる。後に歌と句における影響關係を調査したが、初期における引用の甚だ多いのに比して、後期に比較的少いことが知られる。これは漢詩文が若くして活躍した彼の作品や主張の中で、大きな役割を果したことを意味するものではあるまいか。

彼の讀んだと思はれる漢詩文の書は、大略當時の教養ある人たちの學んだと思はれる一般的な中國の古典であつたやうである。この點で同期の友人たる夏目漱石と酷似してゐる。その讀書の目録の半ばは後の和歌と俳句の影響の部分に（ ）を付して示してゐる。試に詩論詩話の影響について考へてみよう。明治二十九年に發表せられた「俳句二十四體」は、眞率・即興・即景・音調・擬人・廣大・雄壯・勁拔・雅樸・艷麗・纖細・滑稽・奇警・妖怪・祝賀・悲傷・流暢・佞屈・天然・人事・主觀・客觀・繪畫・神韻であるが、かかる分類は漢文學の評論においては常に好んで用ひられるところである。そしてこの二十四の數は、唐の司空圖の「二十四詩品」の影響が考へられる。この書は中國の文學批評史上大きな影響を與へ、従つて多くの注釋書や序跋の類も作られてゐる。また魏謙升に「二十四賦品」、曾紀澤には「演司空表聖詩品二十四首」などの著書もある。二十四の詩品とは、雄渾・沖淡・纖穠・沈著・高古・典雅・洗鍊・勁健・綺麗・自然・含蓄・豪放・精神・縝密・疎野・清奇・委曲・實境・悲慨・形容・超詣・飄逸・曠達・流動である。標題だけでも比較して興味がある。第一の眞率と雄渾の論を比べてみると、

眞率——曰く眞率体曰く雄壯体曰く何曰く何、盡く是れ其体を指すのみ体は虚字なり故に巧拙善惡の意を含むに非ず況して此區別たる曖昧を免れず君子幸ひに粗鹵を咎むる莫れ。

雄渾——大用外腴。眞體內充。返虚入渾。積健爲雄。具備萬物。横絶太空。荒荒油雲。寥寥長風。超以象外。得其環中。持之匪強。來之無窮。

第二十四の神韻（王漁洋の主張するところである。彼は唐詩の五言七言の律絶を選びて「神韻集」を著す。漁洋は司空圖に基く。）と第二十一の超詣の論を聞いてみると、

神韻——即かず離れず實ならず虚ならず主觀ならず客觀ならず之を神韻體といふ故に此體には主客兩觀を區別し難き者二事二物の關係明かならぬ者多し主とする所只精神韻致のみ

超詣——匪神之靈。匪幾之微。如將白雲。清風與歸。遠引若至。臨之已非。少有道氣。終與俗違。亂山

喬木。碧苔芳暉。誦之思之。其聲愈希。

そして冲澹の、遇之匪深。即之愈稀。自然の、俯拾即是。不取諸鄰。清奇の、神出古異。澹不可收。含蓄の、不著一字。盡得風流。流動の、超超神明。返返冥無。などの語も子規のこの神韻について考へらるべき語である。また「墨汁一滴」の、

爲山氏の畫は工緻精微、不折君の畫は雅撲雄健。

を採つてみると、かかる批評の記述は、詩論書においては一般的なもので全く枚擧するに暇がないのである。例へば「詩數」の開巻に、

優柔敦厚。周也。樸茂雄深。漢也。

また同書卷六に、唐初の五言絶句を評して

工緻天然。風味可掬。

また次の簡文の烏棲曲を、

奇麗精工。

と評してゐるが、これが詩話や詩論における極めて普通の批評の方法となつてゐる。彼の和歌にしても俳句にしても、根柢に漢詩文があり詩論詩話があつて、ある時には明確に外面に露れ、或は底流して内に潜んでゐるが、しばしば制作の動機ともなつてゐるのである。「芭蕉雜談」で「あら海や」の句を評して、

天門中斷楚江開の詩は此句の經にして飛直下三千尺の詩は此句の緯なり思ふてこゝに到れば誰れか芭蕉の大手腕に驚かざるものぞ。

と李白の詩をもつて句の發想を考へてゐる。「美の主觀的觀察」に

漢詩を用ゐる漢文の句法を用ふれば緊密ならしむる上にも効力あり。

とも論じてゐるが、彼の作句の態度を端的に述べたものである。

さて本論と關係の深い文を一二次に記載しよう。

三たび歌よみに與ふる書

（前文略）調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な様を歌ふにはなだらかなる調を用ふべく悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく變化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用ふべきは論ずる迄も無之候。然るに歌よみは調は總てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る誤を來すも畢竟從來の和歌がなだらかなる調子のみを取り來りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず歌集ばかり讀みたる歌よみに爾か思はるゝも無理ならぬ事と存候。さてさて困つた者に御座候。（中略）斯る歌よみに蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か讀ませたく存候へども、驕りきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を読むことは承知致すまじく勤めるだけが野暮にや候べき。

歌人は古來からの和歌の領域にのみに閉ぢ込めることをしないで、俳句や漢詩、特に蕪村の句と盛唐の詩の調をも學ぶべきを論じてゐる。元來俳句や和歌と漢詩は異形同趣のものであつて、そのもの自體にはその藝術的價值において上下優劣のあるべきことでないことを論じてゐる。

俳句と漢詩

俳句と和歌と漢詩と形を異にして趣を同らす。中にも俳句と漢詩と殊に似たる處多きは俳句が力を漢詩

に藉りしに因るべきか。芭蕉は杜甫の詩を讀みて其趣味を俳句に移し蕪村は詩の趣味と共に詩の言葉をも俳句に用ひたり。然るに漢詩を解する者往々にして俳句を解せざる者あり。こは俳句を見るに漢詩を見るの標準を誤りしが一旦俳句と漢詩と二致あるに非るを悟るや疑團氷解して始めて漢詩の真相を認め得たる心地す。俳句解すべからずとなす者、亦た俳句を見ること詩を見るが如くせば容易に之れを解し得べし。漢詩を見る中には俳句と暗合したる句もあり、又漢詩の句にして直に俳句と爲し得べき者もあり。今漢詩と之に對する拙句とを並列して大方の一笑に供せんとす。但詩の長所は俳句の長所に非ず、故に詩を譯するにも詩の佳句を取らずして却て凡句惡句を取ること無しとせず、譯し易きに従ふのみ。況んや古人が推敲鍊磨の後漸くにして二三首の佳篇を得以て千歳の後に殘し、が如き者固より余等が咄嗟の間に之を譯し得べきに非ざるをや。詩の一句又は二句位が俳句の一首に相當すること常なり。これも詩に在りては前後の聯絡ある句なるを單獨の句として俳句には譯するなり。故に俳句に譯せんがために詩句を取らば其詩句は單獨に離しても猶完全なる意味を有つ者ならざるべからず。

以上の論を聞けば子規が漢詩と俳句の關係を如何に考へていたかが窺ひ知ることが出來ると共に、彼の漢詩の譯句と共に、他の多くの作もまたこの理念に依つてゐたことが知られるのである。このことは俳句のみならず、和歌についても同じことが言へると思はれることは、右の文の冒頭の語によつて知られるであらう。これが私が後に彼の和歌と俳句と漢詩文の關係を考へる基礎たるものである。

さて右の文に述べられてゐる通り、漢詩文を俳句に譯したものが擧げられてゐる。即ち漢詩五十篇、漢文一篇、計五十一篇と、その譯俳句六十九句が示されてゐる。これはやや雜然として整理せられてゐるとは言ひ難い。これを順序にやや整理を試みて一二の例を擧げてみる。()内は筆者の加筆である。

一、直 譯 句

初月波中上。(梁の何遜の入西塞示南府同僚)

明月の波の上より上りけり

三春時有雁。萬里少行人。(唐の王維の送劉司直赴安西)

歸る雁行く人更になかりけり

二、省 略 譯 句

大漠孤烟直。長河落日圓。(唐の王維の使至塞上)

野の果や霞んで丸き入日影

——孤烟直と長河を省略——

草白狐兔驕(唐の王維の城傍曲)

末枯に人を恐れぬ狐かな

——兔を省略——

三、大 意 譯 句

長安一片月。萬戸擣衣聲。(唐の李白の子夜吳歌)

夕月や站聞ゆる城の内

榆柳蔭後簷。桃李羅堂前。(晉の陶潛の歸田園居)

柳あり桃あり家の前後

四、變語譯句

丘陵盡喬木。昭王安在哉。（唐の陳子昂の薊丘覽古）

徳川の代は亡びけり夏木立

——燕の昭王を徳川におき易へた。——

功名富貴若長在。漢水亦應西北流。（唐の李白の江上吟）

花散つて水は南へ流れけり

——功名富貴を花にかへた。——

五、變意譯句

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。（唐の李白の蘇臺覽古）

翠帳にさしたる月や畑の上

——詩は春，句は秋とす。——

桃之夭夭。其葉蓁蓁。之子于歸。宜其家人。（詩經の國風桃夭）

蓁々たる桃の若葉や君娶る

——歸の意を逆に娶るとす。——

六、添加譯句

李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。（唐の杜甫の飲中八仙歌）

花の酔醒めずと申せ司人

——花の字を添加。——

甚だ不十分ながら、大略右の六つに整理出来るであらうか。これについては、拙稿の（蕪村の句における漢詩文の影響について）（津山高専紀要第一巻第五號）の前文を参照願へれば幸である。

子規の漢籍の愛讀書の目録を想定するためにも参考になると思はれるので、この「俳句と漢詩」に取られてゐる原詩の登載文獻を分析すると次の如くである。

詩 經 一篇二句

唐 詩 選 二十首（内古文眞實所收四首）

古文眞實前集 一首（この一首文選所收）

同 後 集 二 篇（内一篇文選所收）

宋詩別裁集 三 首

明詩別裁集 三 首

古 詩 源 四 首（但し「梁蘭の木詩」とあるは、「梁の木蘭詩」の誤りと思はれる。この詩は古詩。文選所收一首）

杜工部集又は杜律集解 一 首

王 右 丞 集 十三首（内唐詩選所收四首。但し子規の王維の詩としてゐるものの中「檻外低秦嶺」の一首は唐詩選所收の岑參作の「登總持閣」である。）

さて前に和歌、後に俳句における漢詩文の影響について考察したいのであるが、歌については、岩波書店版、昭和三十一年刊の「正岡子規全歌集竹乃里歌」に依り、大略その順序に従つて漢詩文の踏襲顛案の關係

を考察し、俳句については、高濱虚子選、岩波文庫版、昭和十六年刊の「子規句集」に依つた。これには約二萬の句の中から二千三百六句が選ばれてゐる。和歌の全作品と異り、一割強に過ぎないのであるが、虚子の序文の中に「私の見て佳句とするものゝ外、子規の生活、行動、好尚、其の頃の時相を知るに足るもの、并に或事によつて記念すべき句等であつた。」と述べられてゐる通り、句數は一割程度に過ぎなくても、或は子規の全豹を見る一斑の役には十分立ち得ると考へたためである。また疑はしきものは〔 〕を附して記した。

和 歌

明治十八年

- 遠山にうそぶく虎の一聲にあだしけものは跡をかくしつ
司馬遷の報任少卿書、猛虎在深山。百獸震恐。及在陷井之中。搖尾求食。（文選）
- 葉がぐれにひれふる鯉の過つらん蓮の露のこぼれぬる哉
謝朓の遊東園、魚戲新荷動。鳥散餘花落。（古文眞寶前集）
- ともし火は星のごとくにならびたり空か海かとまがふ許りに
頼山陽の泊天草洋、雲邪山邪吳邪越。水天髣髴青一髮。（山陽詩鈔）
- 玉づさをいそぎよみする心地せり見る間にすぐる天津雁金
李白の蘇武、蘇武在匈奴。十年持漢節。白雁飛上林。空傳一書札。（古文眞寶前集）
〔漢書の蘇武傳、敎使者謂單于言。天子上林中得雁。足有係帛。書武等在某澤中。〕
- たださへもさびしき山の奥なりとしらで猿の月になくなり
魏徵の述懐、古木鳴寒鳥。空山啼夜猿。（唐詩選）
- 絲萩の花を枕にむすびつつ臥猪も蝶の夢やみるらん
莊子の齊物論、昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志與。不知周也。俄然覺則蘧蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶與。胡蝶之夢爲周與。胡蝶則必有分矣。
- かせぐらん暮れて樵夫の歸る也せおふましばに月をのせても
陶淵明の歸園田居、侵晨理荒穢。帶月荷鋤歸。（古文眞寶前集・陶淵明集）
- 住の江の磯におりみて蘆田鶴は一聲たかく月になくなり
詩經の小雅・鶴鳴、鶴鳴九臯。其聲聞天。
- 庭もせの草木の影も短くてはや中空にのぼる月かな
王安石の夜直、春色惱人眠不得。月移花影上欄干。（聯珠詩格・錦繡段）
- けふをいつとしらで過ぬる旅寐には夜毎の月ぞ曆なりけり
唐人の詩、山僧不解數甲子。一葉落知天下秋。（文録・詩人玉屑）
〔淮南子の説山訓、見一葉落。而知歲之將暮。〕
岑參の磧中作、走馬西來欲到天。辭家見月兩回圓。今夜不知何處宿。平沙萬里絕人烟。（唐詩選）
- 春たゞばおのが色香も老んとや年のこなたに梅は咲くらん
劉廷之の代白頭翁、洛陽女兒惜顏色。行見落花長嘆息。今年花落顏色改。明年花開復誰在。（唐詩選、古文眞寶前集は宋之問の有所思とす）

○顔是なき子供心は悟りをば開かぬさきの悟りなりけり

孟子の離婁、孟子曰。大人者。不失其赤子之心者也。

〔老子、專氣致柔。能如嬰兒乎。また、常德不離。復歸於嬰兒。〕

明治十九年

○岩ふみて落ちくる瀧を仰ぎ見れば空にしられぬ霧ぞふりける

李白の廬山瀑布、日照香爐生紫烟。遙看瀑布掛長川。飛流直下三千尺。疑是銀河落九天。（聯珠詩格）

明治二十年

○白梅の色はそれとも見えわかで月の光りの匂ふ夜半かな

林和靖の山園小梅、疎影横斜水清淺。暗香浮動月黃昏。（宋詩別裁集・詩人玉屑）

明治二十一年

○さなきだに夕の風に涼しきを椽の梢に月も出けり

王安石の夜直、金鑪香盡漏聲殘。剪剪輕風陣陣寒。春色惱人眠不得。月移花影上欄干。（聯珠詩格・錦繡段）

○夜はふけて行來の人もなごさうつ波の音のみぞ夢に聞ゆる

韋應物の滁州西澗、春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。（三體詩）

○墨田川かりのすまひに五たびまでみちたる月をながめてしがな

岑参の磧中作、走馬西來欲到天。辭家見月兩回圓。（唐詩選）

○いかにせんうき名を流す墨田川すみたる水もにごるならひを

詩經の邶風谷風、涇以渭濁。湜湜其沚。

明治二十二年

○ほとゝぎすともに聞かんと契りけり血に啼くわかれせんと知らねば

白居易の琵琶行、其間旦暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。（古文眞寶前集・唐詩三百首）

明治二十三年

○雲のごとしたがふ人はありとともいかでかくさん天津日かげを

十八史略の周、公李卒。昌立。爲西伯。西伯修德。諸侯歸之。……漢南歸西伯者四十國。皆以爲受命君。三分天下有其二。

同書の武王の項、西伯卒。子發立。是爲武王。東觀兵至盟津。……是時諸侯。不期而會者八百。皆曰。紂可伐矣。王不可引歸。（「文王」の詞書きがあるところは前者の如く思はれるが、意味は後者が當る。）

○とこしへに散らぬつゞれの錦とはもみぢに似たる鳥の跡かな

蒙求の蒼頡制字、蒼頡黃帝下臣。觀鳥跡始作文字。

○紂王の飲む無道酒は池をなし晝の牛肉はやしたるまゝ

十八史略の殷、紂……廣沙丘苑臺。以酒爲池。懸肉爲林。爲長夜之飲。

○渾沌の中に世界がわき出でゝ一つのものが四つとなりけり

○黃帝が易に天下の理をこめて一つのものが八つとなりけり

易經の繫辭上、易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。（但し伏羲氏の八卦を畫したと古來言

はれて来たが黃帝の八卦を畫したる記事を知らず。)

○千年を經れば狐の尾もふえて一つのもが九つとなる。

竹書紀年の上、帝杼八年。征于東海。及三壽。得一狐九尾

○借金で人爵買ふて別品の酌でをさめん胸の癩癧

孟子の告子、有天爵者。有人爵者。仁義忠信。樂善不倦。此天爵也。公卿大夫。此人爵也。古之人。脩其天爵。而人爵從之。今之人脩其天爵。以要人爵。既得爵。而棄其天爵。則惑之甚者也。終亦必亡而已矣。

○夏知らぬ山は扇もいらぬかやいつもさかしにかけておくなり

石川丈山の富士山、仙客來遊雲外巔。神龍棲老洞中淵。雲如紈素煙如柄。白扇倒懸東海天。(覆醬集)

○立ちいでゝはやいく年をふるさとに歸りて見ればあたらしき里

〔賀知章の回郷偶書、少小離家老大回。郷音不改鬢毛催。兒童相見不相識。笑問客從何處來。(唐詩三百首)〕

○故郷を雲と霞の旅の空羽をかはして千鳥をしどり

白樂天の長恨歌、在天願作比翼鳥。在地願作連理枝。(古文眞寶前集・唐詩三百首)

明治二十四年

○我もいま花の友とやゆるされんをちかたよりぞ尋ねきつれば

論語の學而、子曰。……有朋自遠方來。亦不樂乎。

○あへぎつゝ行きかふ人をよそにみてここは涼しき松の下風

○風やどる川邊に夏はなかりけり月やすゞしき水やすゞしき

源英明の夏日閑避暑、池冷水無三伏夏。松高風有一聲秋。(和漢朗詠集)

○かれは富士これは妙義とわきいでゝ山なす雲に夏は來にけり

陶淵明の四時、春水滿四澤。夏雲多奇峰。(古文眞寶前集)

○我戀はまがきのひまを行く駒のまなくひまなく思ふ頃哉

莊子の知北遊、人生天地之間。若白駒之過隙。

〔史記の留侯世家、人生一世間。如白駒過隙。〕

明治二十五年

○心せよ手綱ゆるみしひまを猶月日の駒ははしるなりけり

莊子の知北遊、同上

○松山ゆ東も通ふ言濱の高どの遠く白帆ゆくなり

白樂天の春江、閉閣只聽朝暮鼓。上樓空望往來船。(新撰朗詠集・白氏文集)

○うてなは雲、人馬は豆。五百の青樓には知らぬ時雨のあし宙を飛んで足もとにゆる入相の鐘は上野か淺草
杜牧の阿房宮賦、五步一樓。十步一閣。……長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霧何虹。高低冥迷。

不知西東。歌臺暖響。春光融融。舞殿冷袖。風雨淒淒。(古文眞寶後集・文章軌範)

曹植の美女、青樓臨大路。高門結重關。(玉臺新詠・古詩源)

明治二十七年

○牛に乗りていづくに人の歸るらん柳のちまた桃の下道

杜牧の清明，清明時節雨紛紛。路上行人欲斷腸。借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。（樊川集）

○雲かあらず煙かあらず日の本の山あらはれぬ帆檣の上に

蘇東坡の書王定國所藏烟江疊嶂圖，江上愁心千疊山。浮空積翠如雲烟。山耶雲耶遠莫知。烟空雲散山依然。（宋詩別裁集）

〔頼山陽の泊天洋，雲耶山耶吳耶越。水天髣髴青一髮。（山陽詩鈔）〕

明治二十八年

○月もなき夜頃となれば須磨の浦や沖邊遙かに並ぶ漁火

○漁火の數そふ見れば須磨の浦やうしろの山に月落ちけらし

張繼の楓橋夜泊，月落烏啼霜滿天。江村漁火對愁眠。（唐詩選・三體詩）

○新體詩「園の秋」の，庭十歩秋風吹かぬ隈もなし

〔高適の別董大，十里黃雲白日曛。北風吹雁雪紛紛。（唐詩選）〕

〔唐彦謙の曲江春望，漢朝冠蓋皆陵墓。十里宜春下苑花。（三體詩）〕

〔劉禹錫のの秋風引，何處秋風至。蕭蕭送雁群。朝來入庭樹。孤客最先聞。（唐詩選）〕

○同じく，灯ともして秋の夕を淋しがる

李白の春夜宴桃李園序，古人採燭夜遊。良有由也。（古文眞實後集）

白樂天の春中與盧回周諒華陽觀同居，背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。（白氏文集・和漢朗詠集）

古詩十九首，生年不滿百。常懷千歲憂。晝短苦夜長。何不秉燭遊。爲樂當及時。何能待來茲。（文選・古詩源）

○同じく「胡弓」の，悲しき聲を，ふりたてゝ 歌ふを聞けば あはれなり。少女は知らず 亡國の 恨、と彼や 歌ふらん、國は破て 山河在り、草木青、とや 歌ふらん。

杜牧の泊秦淮，商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。（三體詩・唐詩三百首）

杜甫の春望，國破山河在。城春草木深。（唐詩選・唐詩三百首）

明治三十一年

○霜防ぐ菜畑の葉竹今さしぬ筑波根羸雁を吹く頃

劉禹錫の秋風引，何處秋風至。蕭蕭送雁群。朝來入庭樹。孤客最先聞。（前出）

○とぼり垂れて闇より人は起き出でず牡丹の花に朝日さすなり

白樂天の香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁，日高睡足猶慵起。小閣重衾不怕寒。（白氏文集）

同じく長恨歌，雲鬢花顏金步搖。芙蓉帳暖度春宵。春宵苦短日高起。從此君王不早朝。（白氏文集・古文眞實前集）

○天津橋上繁華の子等の見えしより天津橋下春の水青し

劉廷芝の公子行，天津橋下陽春水。天津橋上繁華子。（唐詩選）

○伊れ昔し顔紅の美少年花賣るおちとなりけるかな

劉廷芝の代悲白頭翁，此翁白頭眞可憐。伊昔紅顏美少年。（唐詩選）

〔白樂天の賣炭翁，賣炭翁。伐薪燒炭南山中。滿面塵灰煙火色。兩鬢蒼蒼十指黑。賣炭得錢何所營。身上衣裳口中食。可憐身上衣正單。心憂炭賤願天寒。夜來城外一尺雪。曉駕炭車輾冰轍。（白氏文集）〕

〔同じく買花，帝城春欲暮。喧喧車馬度。共道牡丹時。相隨買花去。……有一田舍翁。偶來買花處。

低頭獨長歎。此歎無人論。一叢深色花。十戶中人賦。(白氏文集)]

○洛陽の市に花賣る翁にぞ昔の春は問ふべかりける

前述の白樂天の、「買花」と「買炭翁」

○高樓の翠簾もかゝげず春寒み飛び來る蝶を打つ人もなし

杜牧の秋夕，銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲流螢。(聯珠體格・唐詩三百首・三體詩)

○山里に蠶飼ふなる五畝の宅麥はつくらず桑を多く植う

孟子の梁惠王，五畝之宅。樹之以桑。五十者可以衣帛矣。

同じく盡心，五畝之宅。樹牆下以桑。匹婦蠶之。則老者足以衣帛矣。

○月出ずる忍が岡は大吠えて櫻の影を踏む人もなし

白樂天の春夜與盧四周諒華陽觀同居，背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。(和漢朗詠集・白氏文集)

○市中に誰が隠れたる庵ならん花に門閉ぢて經を讀む聲

王康琚の反招隱，小隱隱陸藪。大隱隱朝市。(文選)

白樂天の中隱，大隱住朝市。小隱入丘樊。(白氏文集)

○中垣の境の桃は散りにけり隣の娘きのふとつぎぬ

詩經の周南の桃夭，桃之夭夭。灼灼其華。之子于歸。宜其室家。

○試みに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ

杜甫の寄李白二十韻，筆落驚風雨。詩成泣鬼神。(杜工部集・古文眞寶前集)

詩經の大序，正得失。動天地。感鬼神。莫近於詩。

○子を思ふ峯のましらの鳴く聲に旅行く人の袖ぞゆれける

高適の送李少府貶峽中王府貶長沙，巫峽啼猿數行淚。衡陽歸雁幾封書。(唐詩選)

(杜甫の秋興八首其の二，聽猿實下三聲淚。奉勅虛隨八月槎。(杜工部集))

○丁とうてば丁とうつ槌の音冴えて鍛冶屋の梅の眞白に散る

詩經の周南の兔置，肅肅兔置。椽之丁丁。

○夜を守る砦の篝の影冴えて曠野の月に胡人胡笳を吹く

岑參の胡笳歌送顏眞卿使赴河隴，君不聞胡歌聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。……崑崙山南月欲斜。胡人向月吹胡笳……邊城夜夜多愁夢。向月胡歌誰喜聞。(唐詩選)

○官人の驢馬に鞭うつ影もなし金州門前柳青青

王維の送元二使安西，渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。(三體詩)

同じく寒食汜上，落花寂寂啼山鳥。楊柳青青渡水人。(三體詩)

賈至の西亭春望，日長風暖柳青青。北雁歸飛入宵冥。(唐詩選)

○城中の千戸の杏花咲きて關帝廟下人市をなす

劉禹錫の自朗州至京戲贈看花諸君，紫陌紅塵拂面來。無人道看花回。玄都觀裏桃千樹。盡是劉郎去後栽。(唐詩選)

[戰國策の齊策，群臣進諫。門庭若市]

○普陀落や岸うつ波とうたひつゝ柄杓手にして行くは誰が子ぞ

杜甫の白帝城最高樓，杖藜嘆世者誰子。泣血迸空回白頭。(杜工部集・杜律集解)

- 漢となり晉となる世は夢なれや桃の林を牛に乗つて行く
陶淵明の桃花源記、武陵人……縁溪行。忘路之遠近。忽逢桃花林。……今是何世。乃不知有漢。無論魏晉。（陶淵明集・蒙求）
〔列仙全傳の老子、以明王二十三年。駕青牛車。過函谷關。〕
- 榛の木に烏芽を噛む頃なれや雲山を出で、人烟をうつ
陶淵明の歸去來辭、雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。……懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。（陶淵明集・古文眞實後集）
- 牛かひにいざこと問はん此ほとりに世をのがれたる翁ありやと
- 車して庵訪ひ来る人あらば藥掘らんと出ぬとこたへよ
杜牧の清明、借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。（樊川集）
賈島の尋隱者不遇、松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。（唐詩選）
- 紅粉を流し白粉を注ぐ三千の面影もあらず只麥の月
陸龜蒙の鄴宮、華飛蝶駭不愁人。水殿雲閣別置春。曉日靚粧千騎女。白櫻桃下紫綸巾。（三體詩）
李白の蘇臺覽古、只今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。（唐詩選）
〔同じく越中懷古、越王句踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。只今惟有鷓鴣飛。（唐詩選）〕
- 年々歳々花相似たる向嶋歳々年々人同じからず
劉廷芝の代悲白頭翁、年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。（唐詩選・和漢朗詠集）
- 桑の田は青海原となりぬべし末の松山波は越えじな
同じく代悲白頭翁、己見松柏摧爲薪。更聞桑田變成海。（唐詩選）
- 長安の市の酒屋に桃咲きて李白が軒日斜なり
杜甫の飲中八仙歌、李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。（唐詩選・古文眞實前集）
- 善き酒のもたひの底に残りける惜むべき落花君掃ふ莫れ
岑參の韋員外家花樹、今年花似去年好。去年人到今年老。始知人老不如花。可惜落花君莫掃。（唐詩選）
- 故さとに我に五反の畑あらば硯を焚きて麥うゑましを
十八史略の戰國、蘇秦曰。……使我有洛陽負郭田二頃。豈能佩六國相印乎
晉陸機……弟雲嘗與書曰。君苗見兄文。輒欲燒其硯。（蒙求）
- 夏衣まだぬぎあへぬ旅人の袖吹き返す秋の初風
張説の蜀道後期、客心爭日月。來往預期程。秋風不相待。先至洛陽城。（唐詩選）
- 昔見し面影もあらず衰へて鏡の人のほろほろと泣く
李白の秋浦歌、白髮三千丈。緣愁似箇長。不知明鏡裏。何處得秋霜。（唐詩選）
- 定めなき世は塞翁が馬なれや我病ひありて歌學び得つ
淮南子の人間訓、夫禍福之轉相生。其變難見也。近塞上之人。有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰。此何知乃不爲福乎。居數月。其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰。此何知乃不爲禍乎。家富良馬。其子好騎。隨而折其髀。人皆弔之。其父曰。此何知乃不爲福乎。居一年胡人大入塞。丁壯者引絃而戰。近塞之人。死者十九。此獨以跛之故。父子相保。故福之爲禍。化不可極。深不可測也。
- 三崎に君が御魂を弔へば鶴立ちて北に向きて飛ぶ

頼杏坪の遊芳野，萬人買醉攪芳叢。感慨誰能與我同。恨殺殘紅飛向北。延元陵上落花風。(春草堂詩鈔)
〔蒙求の李陵初詩，武別陵詩曰。雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當歸故郷。一別如秦胡。會見何渠央。愴恨切中懷。不覺淚霑裳。〕

○櫻白く桃紅の垣つゞき同姓の家に雛祭るなり

〔唐子西の二月看梅，桃花能紅李能白。春深何處無顔色。(古文眞寶前集)〕

○遠近の桃咲きにけり田舎家は草餅搗きて雛祭るらし

菅原文時の三月三日，煙霞遠近應同戸。桃李淺深似勸盃。(和漢朗詠集)

○大道の賣卜先生冬枯れてきのふもけふもよる人ぞなき

蒙求の君平賣卜，前漢嚴遵。字君平。蜀郡人。修身自保。非其服弗服。非其食弗食。卜筮於成都市。云云

〔宋子問の明河篇，更將織女支機石。還訪成都賣卜人。(古文眞寶前集)〕

○敦盛の墓弔へば花もなし春風春雨播州に入る

王昌齡の芙蓉樓送辛漸，寒雨連江夜入吳。平明送客楚山孤。(唐詩選・唐詩三百首)

○公を退りて人の委蛇委蛇たり庭木の柳風吹きわたる

詩經の周南の羔羊，羔羊之皮。素絲五紝。退食自公。委蛇委蛇。

○江東の子弟三千の皆盡きてこよひ限りの月に楚歌を聞く

十八史略の西漢，羽夜聞漢軍四面皆楚歌。大驚曰。漢皆已得楚乎。……籍與江東子弟八千人。渡江而西。今無一人還。

○春たくる此川上に誰住みて落花流水枕浮み去る

李白の山中答俗人，問余何意栖碧山。笑而不答心自閑。桃花流水杳然去。別有天地非人間。(古文眞寶前集・聯珠詩格)

白樂天の遇元家履信宅，落花不語空辭樹。流水無心自入池。(和漢朗詠集)

高駢の訪隱者不遇，落花流水認天台。半醉閑吟獨自來。(聯珠詩格)

○若菜摘む裾わの田居の古川に鶴脛ぬれて春の水満つ

○春の水小草がぐれに流れいでゝありとある澤をひたしぬるかな

陶淵明の四時，春水滿四澤。夏雲多奇峯。(古文眞寶前集)

○御園生の花の露散る春の水内濠に落ちて外濠に出ず

司馬禮の宮怨，年年花落無人見。空逐春水出御溝。(唐詩選)

○三層の樓に上れば國廣し春風春水東より來る

陶淵明の讀山海經，微雨從東來。好風與之俱。(古文眞寶前集)

菅原文時の梅，誰言春色從東到。露暖南枝花始開。(和漢朗詠集)

盧僊の南樓望，去國三巴遠。登樓萬里春。(唐詩選)

王之渙の登鸛鵲樓，欲窮千里眼。更上一層樓。(唐詩選)

白樂天の律府西池，今日不知誰計會。春風春水一時來。(和漢朗詠集・白氏文集)

○鳩の巢に鳩こそそだて鶯の巢にそだつてふ時鳥かな

詩經の召南の鵲巢，維鵲有巢。維鳩居之。

○故郷の梅の青葉の下陰に衣浣ふ妹の面影に立つ

樓穎の西施石，西施昔日浣沙津。石上青苔思殺人。（唐詩選）

○大方の寺は若葉にうづもれて三十六峯雨緑なり

杜牧の江南春，南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。（三體詩）

○うすものゝ月の團扇の玉だれのをすの螢を打つ人もなし

○望月のたわる面わの絹團扇君に贈らくは螢うてうぞ（三十二年）

杜牧の秋夕，銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲流螢。（聯珠詩格・唐詩三百首・三體詩は王建作とす。）

○空かわく土用も已に半ばなり雲の峰わく雲の峰の上

○蟬の鳴く椎の老樹の木のうれに半ば見えたる夏雲の峯

○峰となり岩と木となり獅子となり變化となりて動く夏雲

陶淵明の四時，春水滿四澤。夏雲多奇峯。（古文眞寶前集）

○星合の七日も近き天の川桐の木末や淺瀬なるらん

古詩十九首の第十，迢迢牽牛星。皎皎河漢女。……河漢清且淺。相去復幾許。盈盈一水間。脈脈不得語。（文選・古詩源）

○古里に輩狩りし日を思ふ哉鱸の膾正に此時

蒙求の張翰適意，張翰……既入洛。齊王問辟。爲大司馬東曹掾。翰因見秋風起。乃思吳中菰菜蓴羹魚鱸。曰人生貴得適志。何能羈官數千里。以要名爵乎。遂命駕而歸。

〔李白の秋下荊門，霜落荊門紅樹空。布帆無恙挂秋風。此行不爲鱸魚膾。自愛名山入剡中。（唐詩選）〕

蘇東坡の惠崇春江晚景，萋萋滿地蘆芽短。正是河豚欲上時。（宋詩別裁集）

○伯樂は知らずや陸奥の山中に荷負ひ田かへし年ふりぬとは

韓退之の送溫處士赴河陽軍序，伯樂一過冀北之野。而馬群遂空。夫冀北馬多於天下。伯樂雖善知馬。安能空其群耶。（文章軌範・唐宋八家文）

○簾捲く檐端の山の永き日を雲も起らず晝靜かなり

白樂天の香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁，遺愛寺鐘鼓枕聽。香鑪峯雪撥簾看。（和漢朗詠集）

〔陶淵明の擬古，日暮天無雲。春風扇微和。（陶淵明集・古文眞寶前集・文選）〕

○淵明の詩を讀みやみて菊の根にひとり土かふ日は夕なり

陶淵明の雜詩，採菊東籬下。悠然見南山。山氣日夕佳。飛鳥相與還。（文選・古文眞寶前集）

同じく雜詩，秋菊有佳色。裛露掇其英。（全）

同じく讀山海經，衆鳥欣有託。吾亦愛吾廬。既耕亦已種。時還讀我書。（全）

○川上に雞鳴く里の名も知らず山青くして家五つ六つ

陶淵明の桃花源記，有良田美池桑竹之屬。阡陌交通。雞犬相聞。（陶淵明集・蒙求）

同じく歸園田居，方宅十餘畝。草屋八九間。榆柳蔭後園。桃李羅堂前。曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠深巷中。雞鳴桑樹顛。（古文眞寶前集・陶淵明集）

○里遠き門に車の音もなし晝寝の床に散る櫻欄の花

陶淵明の雜詩，結廬在人境。而無車馬喧。問君何能爾。心遠自偏。（前出）

○朝には書を教へて夕には鎌をかつぎて今日も暮れぬる

陶淵明の歸園田居，晨興理荒穢。帶月荷鋤歸。（陶淵明集・古文眞寶後集）

○なかなか書讀むこともものうかり簀子に臥して雲の行くを見る

○仰むげに竹の簀の子に打臥して背ひやひやと雲の行くを見る

蒙求の陶潛歸去，陶潛字元亮。……嘗夏月虛間。高臥北窓之下。清風颯至。自謂羲皇上人。

〔陶淵明の歸去來辭，策扶老以流憩。時矯首而遐觀。雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。（文選・古文眞寶後集・文章軌範）〕

○酒盡くる瓢に瓜の花を活けて絃無し琴の音を聞かばや

陶淵明の五柳先生傳，簞瓢屢空。晏如也。（陶淵明集・古文眞寶後集）

蕭統の陶靖節傳，淵明不解音律。而畜無絃琴一張。每酒適。輒撫弄以寄其意。……淵明歎曰。我豈能爲五斗米。折腰向鄉里小兒。即日解綬去職。（陶淵明集・蒙求の陶潛歸去）

○ひとへ衣襟吹きはなつ夕風に亂れて蟬の聲ぞ涼しき

○戈を取り印を帯ぶるは我老いたり風に吹かれてひとり森を行く

陶淵明の歸去來辭，舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。（文選・古文眞寶後集・文章軌範）

杜甫の短歌行贈王郎司直，西得諸侯棹錦水。欲向何門躡珠履。仲宣樓頭春色深。青眼高歌望吾子。眼中之人吾老矣。（唐詩選・杜工部集）

○麥はみのり蠶はこもりぬとうち語る翁も去りぬ夏の日永さ

陶淵明の歸園田居，披草共來往。相見無雜言。但道桑麻長。桑麻日已長。（古文眞寶後集・陶桐明集）

同じく歸園田居，種苗在東臯。苗生滿阡陌。……但願桑麻成。蠶月得紡績。（全）

〔朱晦庵の雲谷雜詠，野人載酒來。農談日西夕。此意良已勤。感歎情何極。歸去莫頻來。林深山路黑。（古文眞寶前集）〕

○瓜を植ゑ經を講ずる五十年子孫おろかに我老いんとす

陶淵明の辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口，閑居三十載。遂與塵事冥。詩書敦宿好。林園無世情。（陶淵明集・文選）

同じく歸園田居，少無適俗韻。性本愛丘山。誤落塵網中。一去三十年。（全・古文眞寶前集）

同じく責子，白髮被兩鬢。肌膚不復實。雖有五男兒。總不好紙筆。阿舒已二八。懶惰故無匹。阿宣行志學。而不愛文術。雍端年十三。不識六與七。通子垂九齡。但覓梨與栗。（陶淵明集・古文眞寶前集）

〔史記の蕭相國世家，召平者。故秦東陵侯。秦破。爲布衣貧。種瓜於長安城東。瓜美。世俗謂之東陵瓜。〕

○そら豆の花に夕日の傾きて牛かひどもの笛の音ぞする

〔陶淵明の歸園田居，種豆南山下。草盛豆苗稀。……道狹草木長。夕露沾我衣。（陶淵明集・古文眞寶前集）〕

○産守の祭を近み舞ひならず獅子の太鼓の更けて聞ゆる

陸游の遊山西村，簫鼓追隨春社近。衣冠簡朴古風存。（宋詩別裁集・陸放翁詩醇）

○歸らんか歸らんかわが故郷の人の子驕り禮を知らずとふ

論語の公治長，子在陳曰。歸與歸與。吾黨之小子狂簡。斐然成章。不知所以裁之也。

○聞きなれし松の嵐の音ならばこそあながま瓢あながまの世や

蒙求の許由一瓢，許由隱箕山。無盃器。以手捧水飲之。人遺一瓢。得以操飲。飲訖掛於木上。風吹瀝瀝有聲。由以爲煩。遂去之。

○つかさあさる人をたとへば厨なる喰ひ残しの飯の上の蠅

○糞蠅は尿蟲を笑ひ尿蟲は糞蠅そしる世にこそありけれ

○雞の口のそれならなくに青蠅はことひの牛の尻にこそつけ

○馬の尾につきて走りし蠅もあらんとりのこされし牛の尻の蠅

詩經の齊風の雞鳴，匪雞則鳴。蒼蠅之聲。

同じく小雅の青蠅，營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒言。

歐陽修の憎蒼蠅賦，蒼蠅蒼蠅。……胡不爲人之喜。爾形至眇。爾欲易盈。盃盃殘瀝。砧几餘腥。所希抄忽。過則難勝。苦何求而不足。乃終日營營。（唐宋八家文・古文真寶後集）

十八史略の趙，蘇秦以鄙諺說諸侯曰。寧爲雞口。無爲牛後。於是六國從合。

○足たゞば黃河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを

論語の述而，子曰。暴虎馮河。死而無悔者。吾不與也。

華山記，山頂有池。生千葉蓮花。服之羽化。因曰華山。（圓機活法）

○旅枕菊さく野邊に雲垂れて賤が伏屋に衣擣つ也

杜甫の秋興八首の其一，江間波浪兼天湧。塞上風雲接地陰。叢菊兩開他日淚。孤舟一擊故園心。寒衣處處催刀尺。白帝城高急暮砧。（杜工部集・杜律集解）

○都路を思へば猿の聲すなり蘆の花散る古城の月

同じく秋興八首の其二，夔府孤城落日斜。每依北斗望京師。聽猿實下三聲淚。奉使虛隨八月槎。畫省香爐違伏枕。山樓粉堞隱悲笳。請看石上藤蘿月。已映洲前蘆荻花。（全）

○時を得て都の友は榮ゆらん釣する翁見れば悲しも

同じく秋興八首の其三，信宿漁人還泛泛。清秋燕子故飛飛。匡衡坑疏功名薄。劉向傳經心事違。同學少年多不賤。五陵衣馬自輕肥。（全）

○秋深き都はありし様ならで見知らぬ人の車やるらん

同じく秋興八首の其四，聞道長安似奕棋。百年世事不勝悲。王侯第宅皆新王。文武衣冠異昔時。（全）

○御前近く立ちまじらひて仕へしは昔なりけり秋老いんとす

同じく秋興八首の其五，雲移雉尾開宮扇。日繞龍鱗識聖顏。一臥滄江驚歲暮。幾回青瑣點朝班。（全）

○玉殿錦の船もなかりけり秋風白し大宮どころ

同じく秋興八首の其六，瞿塘峽口曲江頭。萬里風烟接素秋。……珠簾繡柱圍黃鵠。錦纜牙樞起白鷗。回首可憐歌舞地。秦中自古帝王州。（全）

○七夕の五百機朽ちて鯨浮く池の蓮散る鄙に住むわれは

同じく秋興八首の其七，昆明池中漢時功。武帝旗旌在眼中。織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。波漂菰米沈雲里。露冷蓮房墜粉紅。關塞極天惟鳥道。江湖滿地一漁翁。（全）

○我昔都の春をうたひけん草摘むをとめ空を漕ぐ船

同じく秋興八首の其八，佳人拾翠春相問。仙侶同船晚更移。移筆昔曾干氣象。白頭吟望苦低垂。（全）

下記七首は杜甫の石壕吏の譯歌

- 石壕の村に日暮れて宿借れば夜深けて門を敲く聲誰そ
- 牆踰えてをぢは走りぬうば一人司の前にかしこまり泣く
- 三郎は城へ召されぬ太郎より太郎告げ來ぬ二郎死にきと
- 生ける者命を惜しみ死にすれば又かへり來ず孫一人あり
- おうなわれ手力無くと裾かゝげ軍にゆかん米炊ぐべく
- うつたふる宿のおうなの聲絶えて咽び泣くらんまだ夜深きに聞くかと思ふ
- 曉のゆくてを急ぎ獨り居るおきなと別れ宿立ちいでつ

杜甫の石壕吏、暮投石壕村。有吏夜捉人。老翁踰牆走。老婦出門看。吏呼一何怒。婦啼一何苦。聽婦前致詞。三男鄴城戍。一男附書至。二男新戰死。存者且偷生。死者長已矣。室中更無人。惟有乳下孫。有孫母未去。出入無完裙。老嫗力雖衰。請從吏夜婦。急應河陽役。猶得備晨炊。夜久語聲絕。如聞泣幽咽。天明登前途。獨與老翁別。（杜工部集）

下記八首は杜甫の新婚別の譯歌

- 麻にまとひ蓬にからむ蔦の手の短かれとは我思はなくに
- ものゝふにとつぐ娘を許さんは路のほとりにすつるまされり
- こよひたゞ君に契りて曉のあらあはたゞし遠き別れは
- 君行かば我たゞ一人如何にしてしうとゞよばんしうとめといはん
- 我せこの君はものゝふ吾はしもものゝふの妻あともひて行け
- さりながら君ひとり行け女あらば軍弱しと人もこそいへ
- 紅粉をつけじ又うすものゝ衣も着じ再び君に逢はん日迄は
- 空かける鳥さへ雌雄はあるものを我一人君をこひつゝをらん

杜甫の新婚別、兎絲附蓬麻。引蔓故不長。嫁女與征夫。不如棄路旁。結髮爲君妻。席不煖君牀。暮婚晨告別。無乃太匆忙。君行雖不遠。守邊赴河陽。妾身未分明。何以拜姑嫜。父母養我時。日夜令我藏。生女有所歸。雞狗亦得將。君今往死地。沈痛迫中腸。誓欲隨君去。形勢反蒼黃。勿爲新婚念。努力事戎行。婦人在軍中。兵氣恐不揚。自嗟貧家女。久致羅襦裳。羅襦不復施。對君洗紅妝。仰視百鳥飛。大小必雙翔。人事多錯迂。與君永相望。（杜工部集）

- 鶴に乗る夢ならなくにしろがねの雪の都に我は來にけり

列仙傳、王子喬周靈王太子晉也。好吹笙作鳳鳴。……後見桓良謂曰。可告我家。七月七日。待我於緱山頭。至期果乘白鶴駐山頭。可望不可到。俯首謝時人。數日方去。後祠緱氏山下（圓機活法）

〔蘇東坡の綠筠軒、若對此君仍大嚼。世間那有楊州鶴。註曰。昔有客相從。各言所志。或願爲楊州刺史。或願資財。或願騎鶴上昂。其一人曰。腰纏十萬貫。騎鶴上楊州。蓋欲兼三人之所欲也。（古文眞寶前集）〕

- 中つ國の民と生れて黃の海の澄めらん御代に逢はでやまめや

王子年拾遺記、丹邱千年一燒。黃河千年一清。皆至聖之君。以爲大瑞。（圓機活法）

〔鮑照河清頌、汚彼四瀆。媚此雙川。澄源崑嶽。鏡流葱山。泉室凝澱。水府清涓。（全）〕

- 山里に稻刈る男けふの日を天長節と知らず顔なる

十八史略の堯、有老人。含哺鼓腹。擊壤而歌曰。日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力于我何有哉。

○をはり田の畑うつ少女こと問はん桃の花さく里いづくぞも

杜牧の清明、借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。（前出）

明治三十二年

○門並に柳植ゑたる家つき春雨細く燕飛ぶなり

〔岑参の西掖郎事、西掖重雲開曙暉。北山疎雨點朝衣。千門柳色連青瑣。三殿花香入紫微。（唐詩選）〕

○山近くいほり結びて永き日をたゞ山を見る人となるべく

王安石の鍾山即事、澗水無聲繞竹流。竹西花草弄春柔。茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽。（宋詩別裁集）

〔李白の獨坐敬亭山、衆鳥飛盡。孤雲獨去閑。相看兩不厭。只有敬亭山。（唐詩選）〕

○月照す狩衣姿ほの見えて春の夜深く笙を吹くなり

柴野栗山の月夜歩禁垣外、上苑西風送桂香。承明門外月如霜。何人今夜清凉殿。一曲霓裳奉御觴。（栗山堂詩集）

○カナリヤの囀り言し鳥彼れも人わが如く晴を喜ぶ

常建の破山寺後禪院、山光悦鳥性。潭影空人心。（唐詩選・唐詩三百首・三體詩）

○昔男ありけり螢あつめ集來て書讀みにけり夕を残りけり

蒙求の車胤聚螢、晉車胤字武子。……家貧不常得油。夏月則練囊盛數十螢火。以照書。以夜繼日。

○いそのかみ項羽劉邦文讀まず劔手に持ち世に立たん我が

章碣の焚書坑、竹帛烟消帝業虛。關河空鎖祖龍居。坑灰未冷山東亂。劉項元來不讀書。（三體詩）

○廬山の雨赤壁の月それを見て君が作る詩にしへしぬがん

蘇東坡の前赤壁賦、壬戌之秋。七月既望。蘇子與客泛舟。遊赤壁之下。清風徐來。水波不興。舉酒屬客。誦明月之詩。歌窈窕之章。少焉月出於東山之上。徘徊於斗牛之間。白露橫江。水光接天。云云（文章軌範・唐宋八家文・古文眞寶後集）

同じく後赤壁賦、是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨臯。二客從予。過黃泥之坂。霜露既降。木葉盡脫。人影在地。仰見明月。顧而樂之。行歌相答。已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良夜。（全）

市川寬齋の東坡赤壁賦、孤舟月上水雲長。崖樹秋寒古戰場。一自風流屬坡老。功名不復畫周郎。（寬齋先生遺稿）

蘇東坡、廬山烟雨浙江潮。不到千般恨未消。到得歸來無別事。廬山烟雨浙江潮。（禪林句集）

○門出にはたゞみて入れし詩の囊車に載せて歸り來んかも

陸游の春日、退紅衣焙熏香冷。古錦詩囊覓句忙。（劔南詩稿）

莊子の天下、惠施多方。其書五車。

鮑明遠の擬古、兩說窮舌端。五車揮筆鋒。（文選）

王維の、戲贈張五弟諶、張弟五車書。讀書仍隱居。（王右丞集）

○鳥も鳴かず人にも逢はぬ山の奥に餌は聞えて石切るらしも

王安石の鍾山卽事，茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽。（前出）

杜甫の題張氏隱居，春山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。（杜工部集・唐詩選）

○秦淮の秋の柳を見るからにから人さびて詩を讀まんかも

賀鑄の秦淮夜泊，官柳動春條。秦淮生暮潮。樓臺見新月。燈火上雙橋。（宋詩別裁集）

〔杜牧の秦淮，烟籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。（三體詩）〕

〔鄭谷の淮上別故人，楊子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。數聲風笛離亭晚。君向瀟湘我向秦。（唐詩別裁集）〕

○わが魂は鳥にもがもや君が行くからの山々見て歸るもの

〔杜甫の夢李白，江南瘴癘地。逐臣無消息。故人入我夢。故我長相憶。恐非平生魂。路遠不可測。魂來楓林青。魂返關塞黑。今君在羅網。何以有羽翼。落月滿屋梁。猶疑見顏色。（古文眞寶前集）〕

○八千ひろの淵の深きに住む龍の願にある玉の如き子や

○淵にすむ龍のあざとの白玉を手にとると見し夢はさめけり（三十三年）

莊子の列禦寇，千金之珠。必在九重之淵。而驪龍領下。子能得玉者。必遭其睡也。使驪龍而寤之。子尙奚微之有哉。

〔菅原道眞の雪化爲霰，摩牙米筴聲聲脆。龍領玉投顆顆寒。（菅家後集・和漢朗詠集）〕

○野の川を踏み行く鶴は薄氷の碎けし穴に泥鱗をついばむ

詩經の小雅の小旻，及び小宛，戰戰兢兢。如履薄氷。

○鳥ならば天翔るべし龜の身の泥に尾を引く御代を樂む

莊子の秋水，莊子曰。……此龜者寧其死爲留骨而貴乎。寧其生而成尾於塗中乎。二大夫曰。寧生而曳尾於塗中。莊子曰。往矣。吾將曳尾於塗中。

○よき人を埋めし跡の墓の石に山茶花散りて掃く人もなし

蘇東坡の驪山，我上朝元春半老。滿地落花無人掃。（古文眞寶前集）

○人去りて上野の山は暮れにけり茶店の旗に櫻ちる鐘

徐師川の春日溪上作時自大梁，斜日落花人散後。淡煙樓閣數聲鐘。（錦繡段）

明治三十三年

○もろこしのからの畫を見る思ひあり驢にのる人の笠上の雪

〔韓退之の左遷到蘭關示姪孫蕭，雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。（唐詩別裁集）〕

〔全唐詩話，相國鄭綰善詩。或曰。相國近爲新詩否。對曰。詩思在灞橋風雪中驢子上。此何以得之。〕

○藥練る山人尋ね入る山にくしき花咲く森の下草

賈島の尋隱者不遇，松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。（唐詩選）

○人にして鳥にありせば妹と二人空舞ひかけり舞ひかけりせな

白樂天の長恨歌，在天願作比翼鳥。在地願作連理枝。（古文眞寶前集・唐詩三百首・白氏文集）

○曉の鴛鴦の小衾静かにて閨の外は雪積りけり

同じく長恨歌，鴛鴦瓦冷霜華重。翡翠衾寒誰與共。（全）

○いにしへのかしこき人は豚飼ひて豚るの子の子賣りて富を得にけり

十八史略の呉，范蠡……久受尊名不祥。乃歸相印。盡散其財。懷重寶閩行。止於陶。自謂陶朱公。貴

累鉅萬。魯人猗頓往問術焉。蠡曰。畜五牝。乃大畜牛羊於猗氏。十年閒。貲擬王公。故天下言富者。稱陶朱猗頓。

○折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安ケキカ釜恙ナキカ

蘇東坡の綠筠軒，可使食無肉。不可居無竹。無肉令人瘦。無竹令人俗。人瘦尚可肥。俗士不可醫。傍人笑此言。似高還似痴。若對此君仍大嚼。世間那有楊州鶴。（古文眞實前集）

○鎌倉のありし都の跡古りて空しく照す麥の上の月

十八史略の殷，殷亡。箕子後朝周。過故殷墟。傷宮室毀壞生禾黍。欲哭不可。欲泣則爲近婦人。乃作麥秀之歌曰。麥秀漸漸兮。禾黍油油兮。彼狡童兮。不與我好兮。

〔李白の蘇臺覽古，舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。唯今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。（唐詩選）〕

○からかねの茶拵のかたに鑄いだしゝ落花水面皆文章の句意

朱熹の春日讀書樂，好鳥杖頭亦朋友。落花水面皆文章。

○歌よみにつどひし人の歸る夜半を花を催す雨瀧の如し

頼三樹三郎の和春簾雨窓，春自往來人送迎。愛憎何事惜陰晴。落花雨是催花雨。一樣檐聲前後情。（北溟遺珠）

○渾沌ガニツニ分レ天トナリ土トナルソノ土ガタワレハ

〔鶡冠子，兩儀未分。其氣混沌。〕

〔三五曆紀，天地如雞子。盤古生其中。萬八千歲。天地開闢。陽清爲天。陰濁爲地。〕

○蓬生の病の床に鶴をくひ牡丹をながめわが富貴足る

周茂叔の愛蓮說，晉陶淵明獨愛菊。自李唐來。世人甚愛牡丹。……予謂。菊華之隱逸者也。牡丹華之富貴者也。（古文眞實後集）

○カグツチノアラブル神ノアラグルト玉モ瓦モ共ニ焼ケケリ

書經の胤征，火炎崑岡。玉石俱焚。天吏逸德。烈于猛火。

○ヨキ歌ノ世ニ出デネバ小夜更ケテ鬼ス、リ泣ク聲モ聞エヌ

詩經の大序，正得失。動天地。動鬼神。莫近於詩。（前出）

杜甫の寄李白，筆落驚風雨。詩成泣鬼神。（前出）

○我ガ手形紙ニオシツケ見テアレド雲モ起ラズタ、人ニシテ

杜甫の禹廟，古屋畫龍蛇。雲氣生虛壁。（唐詩選・杜工部集）

同じく貧交行，翻手作雲覆手雨。紛紛輕薄何須數。（全）

○我庭の松の木陰に菊さけば昔の人し思ほゆるかな

陶淵明の歸去來辭，三徑就荒。松菊猶存。（陶淵明集・古文眞實後集・文章軌範）

○我庭にさける黃菊の一枝を折らまくもへど足なへわれは

陶淵明の飲酒，采菊東籬下。悠然見南山。（文選・古文眞實前集）

○小車の車ゆらゝに見て過ぐる垣内の梅の實豆の如し

李益の青梅，青梅如豆試嘗新。脆核虛中未有仁。（錦繡段）

陳華甫の暮春，青梅如豆帶煙垂。紫葳成拳着雨肥。（聯珠詩格）

○たて川の茅場の庵を訪ひ來れば留守の門邊に柳垂れたり

陶淵明の五柳先生傳，先生不知何許人。亦不詳其姓字。宅邊五柳樹。因以爲號。（古文眞寶後集）

張南史の陸勝宅秋雨中探韻同前，醉裏欲尋騎馬路。蕭條是處有垂楊。（唐詩選）

明治三十四年・明治三十五年は著しい引用は認められない。

俳 句

俳句について漢文學の影響を見れば、和歌よりも漢文調のものが注意を引く。例へば

酒のあらたならんよりは蕎麥のあらたなれ

詩腸枯れて病骨を護す蒲団かな

鳥鳶をかへり見て曰くしぐれんか

大道の柳依依として洛に入る

餘命いくばくかある夜短し

眠らんとす汝靜かに蠅を打て

雨となりぬ雁聲昨夜低かりし

上野山餘花を尋ねて吟行す

蘭の如き君子桂の如き儒者

吾に爵位なし月中の桂手折るべく

薰風吹袖釣竿擔ぐ者は我

これらは和歌には少い漢文調である。さて次に俳句における漢詩文の影響関係を見よう

明治二十五年

○大空のまつたゞ中やけふの月

邵康節の清夜吟，月到天心處。風來水面時。一般清意味。料得少人知。（古文眞寶前集）

○明月や伊豫の松山一萬戸

李白の子夜呉歌，長安一片月。萬戸搗衣聲。（唐詩選・古文眞寶前集）

○下駄箱の奥になりけりきりきりす

詩經の關風七月，七月在野。八月在宇。九月在戸。十月蟋蟀入我牀下。

○鵲啼くや一番高い木のさきに

陶淵明の歸園田居，狗吠深巷中。雞鳴桑樹顛。（陶淵明集・古文眞寶前集）

明治二十六年

○我王の二月に春の立ちにけり

春秋の隱公元年，元年。春王正月。

春秋左氏傳の隱公，元年。春王。周正月。

○君行かばわれとゝまらば冴返る

○行く我にとゞまる汝に秋二つ（二十八年）

蒙求の李陵初詩，蘇武……子當留斯館。我當歸故郷。一別如秦胡。會見何渠央。

○鶯や朝寢を起す人もなし

無名氏の伊州歌，打起黃鶯兒。莫教枝上啼。啼時驚妾夢。不得到遼西。（唐詩選）

○寺に寝る身の尊さよ涼しさよ

杜甫の遊龍門奉先寺，已從招提遊。更宿招提境。欲覺聞晨鐘。令人發深省。（杜律集解・唐詩選）

○掛茶屋は盧生に似たる晝寝かな

○足しびれて邯鄲の晝寝夢さめぬ（三十年）

李泌の枕中記，道者呂翁。于邯鄲邸舍中。值少年盧生。自歎其困。翁操囊中枕。授之曰。枕此當令子榮適如意。生于寐中。娶清河崔氏女。舉進士。登甲科。官河西隴右節度使。尋拜中書侍郎同中書門下平章事。掌大政十年。封趙國公。三十餘年。出入中外。崇盛無比。老乞骸骨不許。卒于官。欠伸而寤。初主人蒸黃粱爲饌。時未向熟也。呂翁笑謂。人世之事。亦猶是矣。生曰。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。再拜從而去。（圓機活法）

○風吹て飛ばんとぞ思ふ衣がへ

○夏羽織われをはなれて飛ばんとす（二十八年）

陶淵明の歸去來辭，舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。（前出）

○山を出てはじめて高し雲の峰

○雲無心南山の下に畑打つ（三十年）

陶淵明の歸去來辭，雲無心以出岫。鳥倦飛而知還。（前出）

○待宵や降つても晴ても面白き

蘇東坡の飲湖上初晴後雨，水光瀲灩晴偏好。山色空濛雨亦奇。（宋詩別裁集）

○山高く月小にして人舟にあり

○鶉鴒や水瘦せて石あらはるゝ（二十七年）

蘇東坡の後赤壁賦，於是攜酒與魚。復遊於赤壁之下。江流有聲。斷岸千尺。山高月小。水落石出。曾日月之幾何。而江山不可復識矣。（前出）

○朝や夕日の里は見えながら

杜牧の山行，遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。（三體詩）

○月落て江村蘆の花白し

張繼の楓橋夜泊，月落烏啼霜滿天。江村漁火對愁眠。（唐詩選・三體詩）

○南山にもたれて咲くや菊の花

○菊咲くや草の庵の大硯（二十七年）

陶淵明の飲酒，結廬在人境。而無車馬喧。……採菊東籬下。悠然見南山。（前出）

○たらちねのあればぞ悲し年の暮

蒙求の子路負米，家語。仲由字子路。見孔子曰。負重涉遠。不擇地而休。家貧親老不擇祿而仕。昔由事二親之時。常食藜藿之實。爲親負米百里之外。云云

○犬吠て里遠からず冬木立

陶淵明の歸園田居，曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠深巷中。雞鳴桑樹顛。（前出）

明治二十七年

○子を負うてひとり畑うつやもめかな

〔杜甫の兵車行，君不聞漢家山東二百州。千村萬落生荆杞。縱有健婦把鋤犁。禾生隴畝無東西。（古文

眞寶前集・唐詩三百首]]

○六國の印章重し春の風

十八史略の趙，蘇秦……爲從約長。并相六國。行過洛陽。車騎輕重。擬於王者。昆弟妻嫂。側目不敢視。……使我有洛陽負郭田二頃。豈能佩六國相印乎。

○史家村の入口見ゆる柳かな

白樂天の題峽中石上，巫女廟花紅似粉。昭君村柳翠於眉。（白氏文集・和漢朗詠集）

○梅を見て野を見て行きぬ草加迄

高青邱の尋胡隱君，渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家。（高青邱詩醇）

雍陶の城西訪友人別墅，澧水橋西小路斜。日高猶未到君家。村園門巷多相似。處處春風枳殼花。（三體詩）

○土手一里依々戀々と柳かな

○大道の柳依々として洛に入る（三十年）

楚辭の九思の傷時，顧章華兮太息。志戀戀兮依依。

詩經の小雅の采薇，昔我往矣。楊柳依依。今我來思。雨雪霏霏。

○三十六坊一坊残る秋の風（三十一年）

○三十六宮荒れ盡して草芳しき

公乘億の長安八月十五夜賦，秦甸之一千餘里。凜凜水鋪。漢家之三十六宮。澄澄粉飾。（和漢朗詠集）

〔李白の登金陵鳳凰臺，吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠成古丘。（唐詩選・唐詩三百首）〕

○竹植ゑて朋有り遠方より來る

論語の學而，有朋自遠方來。不亦樂乎。

○夏山の雲湧いて石横はる

賈島の題李凝幽居，過橋分野色。移石動雲根。（唐詩選・三體詩）

○進め進め角一聲月上りけり

杜牧の題齊安城樓，鳴軋江樓角一聲。微陽澹澹落寒汀。（三體詩）

大江朝綱の王昭君，胡角一聲霜後夢。漢宮萬里月前陽。（和漢朗詠集）

○月更けて東坡の舟は流れけり

蘇東坡の後赤壁賦，反而登舟。放乎中流。聽其所止而休焉。時夜將半。（前出）

○生きて歸れ露の命と言ひながら

十八史略の西漢の孝昭皇帝，李陵謂武曰。人生如朝露。何自苦如此。

蒙求の李陵初詩，武別陵詩曰。雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當歸故郷。一別如秦胡。會見何渠央。

○鳥啼いて赤き木の實をこぼしけり

謝眺の遊東園，魚戲新荷動。鳥散餘花落。（古文眞寶前集）

○村遠近雨雲垂れて稻十里

菅原道眞の三月三日，煙霞遠近應同戸。桃李淺深似勸盃。（菅家文草・和漢朗詠集）

〔高適の別董大，十里黃雲白日曛。北風吹雁雪紛紛。（前出）〕

○立札や法や罪三章の筆始

十八史略の西漢の太祖高皇帝，吾當王關中。與父老約。法三章耳。殺人者死。傷人及姿抵罪。餘悉去秦苛法。秦民大喜。

○永き日や驛馬を追ひ行く鞭の音

〔崔國輔の少年行，遺卻珊瑚鞭。白馬驕不行。章臺折楊柳。春日路傍情。（唐詩選）〕

○此春は金州城に暮れてけり

杜甫の絶句，今春看又過。何日是歸年。（唐詩選）

○春らしきものもなし只角の聲

王維の送平淡然判官，黃雲斷春色。畫角起邊愁。（唐詩選・王右丞集）

○曲水や盃の舟筆の棹

○曲水の詩や盃に遅れたる（三十三年）

王逸少の蘭亭記，永和九年。歲在癸丑。暮春之初。會于會稽山陰之蘭亭。……有清流激湍。映帶左右。引以為流觴曲水。列坐其次。雖無絲管絃之盛。一觴一詠。亦足以暢彼幽情。（古文眞寶後集）

李白の江上吟，木蘭之枻沙棠舟。玉簫金管坐兩頭。（唐詩選）

○舟で行き歩で行く梅の十ヶ村

高青邱の尋胡隱君，渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家。（前出）

陸放翁の遊山西村，山重水復疑無道。柳暗花明又一村。（宋詩別裁集・陸放翁詩醇）

○梅の花柴門深く鎖しけり

橘直幹の請被特蒙天恩兼任民部大輔闕狀，藜藿深鎖。雨濕原憲之樞。（本朝文粹・和漢朗詠集）

盧仝の茶歌，柴門反關無俗客。紗帽籠頭自煎喫。（古文眞寶前集）

杜甫の崔氏東山草堂，何謂西莊王給事。柴門空閉鎖松筠。（杜律集解）

同じく嚴公仲枉駕草堂兼携酒饌得寒字，百年地僻柴門迥。五月紅深草閣寒。（仝）

○金州の城門高き柳かな

○城門を出て遠近の柳かな

○大門につきあたりたる柳かな

白樂天の春至，白片落梅浮澗水。黃梢新柳出城牆。（和漢朗詠集）

大江朝綱の尋春花，青絲繆出陶門柳。白玉裝成度嶺梅。（仝，或は云ふ菅原文時の作と。）

○吾は寝ん君高樓の花に酔へ

李太白の山中對酌，兩人對酌山花開。一盃一盃復一盃。我醉欲眠君且去。明朝有意抱琴來。（古文眞寶前集）

杜甫の短歌行贈王郎司直，王郎酣拔劍斫地歌莫哀。……仲宣樓頭春色深。青眼高歌唱吾子。眼中之人吾老矣。（唐詩選）

〔李白の春夜宴桃李園序，開瓊筵以坐華。飛羽觴而醉月。（古文眞寶後集）〕

〔羊士諤の登樓，秋風南陌無車馬。獨上高樓故園情。（唐詩選）〕

○花の酔さめずと申せ司人

杜甫の飲中八仙歌，李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。（唐詩選）

○短夜や足跡許りぞ残りける（前書きに「百鬼夜行」とあり）

江談抄卷三，野篁并高藤卿。中納言中將之時。於朱雀門。遇百鬼夜行。

○蝸牛や雨雲さそふ角のさき

白樂天の對酒，蝸牛角上爭何事。石火光中寄此身。（和漢朗詠集）

○撫子に蝶々白し誰の魂

莊子の齊物論，昔者莊周。夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自適志與。不知周也。俄然覺。則蘧蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶與。胡蝶之夢爲周與。（前出）

○若竹や豆腐一丁米二合（「辭富居貧」の前書きあり）

孟子の萬章下，爲貧者，辭尊居卑。辭富居貧。

○叢に鬼灯青き空家かな

杜甫の玉華宮，陰房鬼火青。壞道哀湍瀉。（唐詩選）

○朝寒や起つて廊下を徘徊す

白樂天の長恨歌，攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏遞遞開。（古文眞寶前集・唐詩三百首）

○やゝ寒し襟を正して坐りけり

蘇東坡の前赤壁賦，蘇子愀然正襟。危坐而問客曰。何爲其然也。（古文眞寶後集・唐宋八家文・文章軌範）

○長き夜の面白きかな水滸傳

水滸傳は宋末の宣和遺事に基き，宋の徽宗の世に起つた群盜宋江以下三十六人の事蹟を描寫した長篇小説。作者未詳。

○酒あり十有一人秋の暮

蘇東坡の後赤壁賦，已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良何。客曰。今者薄暮舉網得魚。巨口細鱗。狀如松江之鱸。願安所得酒乎。歸而謀諸婦。婦曰我有斗酒。藏之久矣。以待子不時之需。於是攜酒與魚。復遊於赤壁之下。（前出）

○易を點し兌の卦に到り九月盡

兌の卦は一陰二陽の上に乗る，喜びの外に現はれる卦象に取る。象に云ふ「兌ハ説ナリ。剛中ニシテ柔外ナリ。説ビテ以テ貞ナルニ利ロシ。是ヲ以テ夫ニ順ジ人ニ應ズルナリ。」と九月は上に陽一乗りたるもので，十月は全陰の月である。

○病起杖に倚れば千山萬嶽の秋

齋藤監物の題兒島高德書櫻樹圖，踏破千山萬嶽煙。鑾輿今日到那邊。

○行く我にとゞまる汝に秋二つ

蒙求の李陵初詩，武別陵詩曰。雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當歸故鄉。一別如秦胡。會見何渠央。（前出）

○白頭の吟を書きけり捨團扇

○捨てられて厠に古りし團扇かな

司馬相如の妻卓文君の白頭吟，皓如山上雪。皎若雲間月。聞君有兩意。故來相決絶。（古詩源）

班婕妤の怨歌行，新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團圓似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐

秋節至。涼颯奪炎熱。棄捐篋笥中。思情中道絶。（古文眞寶前集・古詩源）

○七夕やおよそやもめの涙雨

古詩十九首の第十，迢迢牽牛星。皎皎河漢女。纖纖擢素手。札札弄機杼。終日不成章。泣涕零如雨。河漢清且淺。相去復幾許。盈盈一水間。脈脈不得語。（文選・古詩源）

○玉川や夜毎の月に砧打つ

劉元叔の妾薄命，北斗星前橫旅雁。南樓月下擣寒衣。（和漢朗詠集）

李白の子夜吳歌，長安一片月。萬戶擣衣聲。（前出）

○あるが中に詩人瘦せたり月の宴

本事詩，李太白曰……戲杜曰。飯顆山頭逢杜甫。頭戴笠子日卓午。借問別來太瘦生。總爲從前作詩苦。蓋譏其拘束也。（圓機活法）

○月に問へ東坡いづくに去りしかと（東坡赤壁圖の前書きあり）

蘇東坡の前赤壁賦，蘇子曰。客亦知夫水與月乎。逝者如斯。而未嘗往也。盈虛者如斯。而卒莫消長。（前出）

○秋風や高井のていれき三津の鯛（故郷の蓴鱸くひたしといひし人もあるとか、の前書きがある）

蒙求の張翰適意，張翰字季鷹。吳人。有清才。善屬文。而縱任不拘。時人號爲江東步兵。既入洛。齊王問辟。爲大司馬東曹掾。翰因見秋風起。乃思吳中菰菜蓴羹鱸魚膾。曰。人生貴得適志。何能羈宦數千里。以要名爵乎。遂命駕而歸。

○道盡きて雲起りけり秋の山

杜牧之の山行，遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家（三體詩）

○秋の山突兀として寺一つ

（王之渙の涼州詞，黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。（唐詩選・唐詩三百首）

○朝鳥の來ればうれしき日和かな

常建の破山寺後禪院，清晨入古寺。初日照高林。……山光悅鳥性。潭影空人心。（前出）

○童子呼べば答なし只蚯蚓鳴く

歐陽修の秋聲賦，予謂童子。此何聲也。汝出視之。童子曰。星月皎潔。明河在天。四無人聲。聲在樹間。予曰。噫噫悲哉。此秋聲也。胡爲乎來哉。……童子莫對。垂頭而睡。但聞四壁蟲聲唧唧。如助子之歎。（古文眞寶後集・唐宋八家文）

○我に落ちて淋しき桐の一葉かな

○桐の葉のいまだ落ちざる小庭かな（三十一年）

唐人の詩，山僧不解數甲子。一葉落知天下秋。（前出）

○紅葉焼く法師は知らず酒の爛

白樂天の送王十八歸山寄題仙遊寺，林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。（白氏文集・和漢朗詠集）

○柳樹屯紅葉する木もなかりけり

白樂天の秋雨中秋元九，不堪紅葉青苔地。又是涼風暮雨天。（全）

○松に菊古きはものなつかしき

陶淵明の歸去來辭，三徑就荒。松菊猶存。……景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。（前出）

○君が代は道に拾はぬ落葉かな

十八史略の唐の太宗文武皇帝，上曰。當去奢省費。輕徭薄賦。選用廉吏。使民衣食有餘。自不盜。安用重法邪。自是數年後。路不拾遺。商旅野宿焉。

○鯁汁一休去つて僧もなし

元微之の菊花，不是花中偏愛菊。此花開後更無花。（和漢朗詠集）

○金殿のともし火細し夜の雪

〔白樂天の與元微之書，憶昔封書與君夜。金鑾殿後欲明天。今夜封書在何處。廬山庵裏曉燈前。（白氏文集）〕

〔菅原文時の宮鶯囀曉光，西樓月落花間曲。中殿燈殘竹裏音。（和漢朗詠集）〕

明治二十九年

○今年はと思ふことなきにしもあらず（三十而立と古の人もいはれけんの前書きがある）

論語の爲政，吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。

○垂れこめて古人を思ふ春日かな

詩經の邶風綠衣，我思古人。俾無訖兮。

○この春を鏡見ることもなかりけり

張九齡の昭鏡見白髮，宿昔青雲志。蹉跎白髮年。誰知明鏡裏。形影自相憐。（唐詩選）

○山の家や留守に雲起る鮓の石

賈島の題李凝幽居，過橋分野色。移石動雲根。（前出）

橘直幹の春宿山寺，觸石春雲生枕上。銜峯曉月出窻中。（和漢朗詠集）

○匹夫にして神と祭られ雲の峰

蘇東坡の潮州韓文公廟碑，匹夫而爲百世師。一言而爲天下法。（古文眞寶後集・唐宋八家文・文章軌範）

○夏川や中流にしてかへり見る

漢武帝の秋風辭，泛樓船兮濟汾河。橫中流兮揚素波。（古文眞寶後集・文選）

蘇東坡の與王郎昆仲及兒子邁繞城觀荷花，孤舟任斜橫。中流自偃仰。（宋詩別裁集）

○夏川のあなたに友を訪ふ日かな

常建の三日尋李九莊，雨歇楊柳東渡頭。永和三日盪輕舟。故人家在桃花岸。直到門前溪水流。（唐詩選）

○清水ありや婆子曰く茶を喫し去れ

禪林句集の三字關，喫茶去。

○美服して牡丹に媚びる心あり

○宰相の詩會催す牡丹かな

李白の清平調三首の其一，雲想衣裳花想容。春風拂檻露華濃。（唐詩選）

同じく其三，名家傾國兩相歡。常得君王帶笑看。

○長き夜や千年の後を考へる

古詩十九首の第十五，生年不滿百。常懷千歲憂。晝短苦夜長。何不秉燭遊。（文選・古詩源・古文眞寶前集）

○長き夜や孔明死する三國志

三國志は陳壽のものでなく、恐らくは羅貫中の作と云はれる三國志演義であらう。

○打ちやみつ打ちつ砧の恨あり

白樂天の聞夜砧，誰家思婦秋擣帛。月苦風淒砧杵悲。（和漢朗詠集・白氏文集）
李白の子夜呉歌，長安一片月。萬戶擣衣聲。秋風吹不盡。總是玉關情。（前出）

○吾に爵位なし月中の桂手折るべく

孟子の公孫丑，我無官守。我無言責也。

〔蒙求の郤詵一枝，郤詵字廣基。……秦始皇中舉賢良。對策上第。拜議郎。遷雍州刺史。武帝於東堂會送。問詵曰。卿自以爲何如。詵對曰。臣舉賢良。對策爲天下第一。猶桂林一枝崑山片玉。〕

○詩腸枯れて病骨を護す蒲團かな

蘇東坡の和孫叔靜兄弟李端叔唱和，病骨瘦欲折。霜鬢籟更疎。
楊萬里の清明果飲，絶愛杞萌如紫蕨。爲烹茗碗洗詩腸。（成齋詩抄）
盧仝の茶歌，兩碗破孤悶。三碗搜枯腸。（古文眞寶前集）

○三十にして我老いし懷爐かな

論語の學而，子曰。吾十有五而志于學。三十而立。

○嘈々としぐるゝ音や四つの絲（前書きに「琵琶を聴く」とあり）

白樂天の琵琶行，大絃嘈嘈如急雨。小絃切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。（古文眞寶前集・唐詩三百首）

明治三十年

○長安の市に日永し賣卜者

蒙求の君平賣卜，前漢嚴遵字君平。蜀郡人。修身自保。非其服弗服。非其食弗食。卜筮於成都市。

○雲無心南山の下に畑打つ

陶淵明の歸去來辭，雲無心而出岫。鳥倦飛而知還。……懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。（前出）
同じく飲酒，采菊東籬下。悠然見南山（前出）

○鶯横町塀に梅なく柳なし

杜審言の和晉陵陸丞早春遊，雲霞出海曙。梅柳度江春。淑氣催黃鳥。晴光轉綠蘋。（唐詩選・三體詩）

○餘命いくばくかある夜短し

向子期の思舊賦，寄餘命於寸陰。（文選）

白樂天の微之敦書晦叔相次長逝巋然自傷，長夜君先去。殘年我幾何。（白氏文集・倭漢朗詠集）

○五斗米の望もなく古裕

蒙求の陶潛歸去，郡遣督郵至縣。吏白。應束帶見之。潛歎曰。吾不能爲五斗米折腰。拳拳事鄉里小人邪。即解印綬去縣。乃賦歸去來

○日曜や浴衣袖廣く委蛇委蛇たり

詩經の召南の羔羊，羔羊之皮。素絲五紞。退食自公。委蛇委蛇。（前出）

○複道や銀河に近き灯の遍ひ

十八史略の秦始皇帝，始皇……先作前殿阿房。……周馳爲閣道。自殿下直抵南山。表南山之顛以闕。爲複道。自阿房渡渭。屬之咸陽。以象天極閣道絕漠抵營室也。

杜牧之の阿房宮賦，長橋臥波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。（古文眞寶後集・文章軌範）
蘇東坡の驪山，複道凌雲接金闕。樓觀隱煙橫翠空。（古文眞寶前集）

○大菊や吾は小菊を愛すかな

周茂叔の愛蓮説，晉陶淵明獨愛。……予獨愛蓮之出淤泥而不染。（前出）

○王孫を市にあはれむ師走かな

劉安の招隱士，王孫遊兮不歸。春草生兮萋萋。（文選・楚辭の招隱）

溫庭筠の楊柳枝，繫得王孫歸意切。不關春艸綠萋萋。（唐詩選）

○年忘酒泉の太守鼓打つ

○鷹狩や豫陽の太守武を好む（三十二年）

岑參の酒泉太守席上醉後作，酒泉太守能劍舞。高堂置酒夜擊鼓。（唐詩選）

明治三十一年

○金持は涼しき家に住みにけり

蘇東坡の足柳公權聯句，人皆苦炎熱。我愛夏日長。薰風自南來。殿閣生微涼。……願言均此施。清陰分四方。（古文眞寶前集。前四句は柳公權の句）

○琵琶一曲月は鴨居に隠れけり

白樂天の琵琶行，曲終抽撥當心畫。四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。（前出）

○朝顔の花猶存す午の雨

陶淵明の歸去來辭，三徑就荒。松菊猶存。（前出）

白樂天の放言，松樹千年終是朽。槿花一日自爲榮。（和漢朗詠集）

兼明親王の供養自筆法華經願文，來而不留。薤薤有拂晨之露。去而不返。權籬無暮之花。（本朝文粹・和漢朗詠集）

○侃々も諤々も聞かず冬籠

論語の鄉黨，朝與下大夫言。侃侃如也。與上大夫言。誾誾如也。

同じく先進，冉有子貢。侃侃如也。

楚辭の惜誓，或直言之諤諤。

說苑の正諫，士無諤諤之友。

明治三十二年

○葦剪つて酒借りに行く鄰かな（前書きに「喜人見訪」とある）

杜甫の贈衛八處士，昔別君未婚。問答未及已。兒女羅酒漿。夜雨剪春葦。新炊間黃粱。（古文眞寶前集・杜工部集）

○水清く瓜肥えし里に隠れけり

史記の蕭相國世家，召平者故秦東陵侯。秦破。爲布衣貧。種瓜於長安城東。瓜美。世俗謂之東陵瓜。

（三體詩薛能の老圃堂，邵平瓜地接吾廬。註に引く）

○年忘れ一斗の酒を盡しけり

杜甫の飲中八仙歌，李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。（唐詩選・古文眞寶前集）

明治三十三年

○和歌に瘦せ俳句に瘦せぬ夏男

李白の戲杜，爲問緣何太瘦生。只從來爲作詩苦。（前出）

明治三十四年

見當らず

明治三十五年

○脩竹千竿灯漏れて碁の音涼し

白樂天の與元微之書，前有喬松十數株。脩竹千餘竿。（自氏文集）

嚴維の歲初喜皇甫侍御至，明朝別後門還掩。脩竹千竿一老身。（三體詩）

○夜涼如水三味彈きやめて下り舟

王建の宮詞，玉墻夜色涼如水。臥看牽牛織女星。（三體詩・唐詩三百首は杜牧之作とす。前出）

〔白樂天の琵琶行，醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移船相近邀相見。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。前出〕

○破團扇夏も一爐の備かな

〔壺公の夜雪，一爐柴火三杯酒。誰知山陰有戴逵。（錦繡段）〕

○首あげて折々見るや庭の萩

陶淵明の歸去來辭，策扶老以流憩。時矯首而游觀。（前出）

以上子規の和歌の總てと俳句の約一割について漢文學の踏襲・翻案等の背景を考察して來たのであるが、特に次の四つことが注目せられる。即ち

一 同じ漢詩文が和歌と俳句の雙方に影響したものが多く、或は二首又は二句以上に引用せられたものも多く認められる。これは子規の漢詩文に對して一種の好みを推察することが出来るやうに思はれる。

二 江戸時代以來の教養の基本的役割を持つてゐた漢籍が、子規についても大體妥當してゐる。故事成語の引用も多いが、やはり韻文の影響が顯著で、特に流行を見た詩集即ち三體唐詩・古文眞寶前集・唐詩選・古詩源・和漢朗詠集等である。

三 引用や影響については、最初の「俳句と漢詩」で述べたやうに複雑多彩であつて、必ずしも表面に出たものばかりではない。従つて私の見落しも尠くないであらう。

四 個人としては陶淵明と杜子美の影響が最も著しく認められ、次いで白居易であらう。この事實も江戸時代以來の傾向と相似たものと言へるであらう。邦人の詩も少なからず影響してゐる。

次にその書目を整理してみると、

易	經
書	經
詩	經
春秋	左氏傳
論	語（周孔丘）
孟	子（周孟軻）
〔史	記（漢司馬遷）〕

[竹書紀年(撰者未詳)]
十八史略(元曾先之)
老子(周李耳)
莊子(周莊周)
淮南子(漢劉安)
蒙求(唐李瀚)
拾遺記(秦王嘉)
列仙全傳(明李攀龍)
楚辭(漢劉向)
文選(梁蕭統)
陶淵明集(晉陶潛)
[玉臺新詠(陳徐陵)]
杜工部集・杜律集解(唐杜甫)
王右丞集(唐王維)
白氏文集(唐白居易)
樊川集(唐杜牧)
成齋詩抄(宋楊萬里)
陸放翁詩醇(宋陸游)
高青邱詩醇(明高啓)
文章軌範(宋謝枋得)
三體唐詩(宋周弼)
唐詩選(明李攀龍?)
古文眞寶前集(宋黃堅)
同後集(同)
聯珠詩格(元干濟)
唐詩三百首(清蘅塘退士)
唐宋八家文讀本(清沈德潛)
[唐詩別裁集(同)]
宋詩別裁集(同)
明詩別裁集(同)
古詩源(清王士禛)
[本事詩(唐孟榮)]
圓機活法(明王世貞?)

邦人の編著

[本朝文粹(藤原明衡)]
[江談抄(大江匡房)]

〔菅家文草・菅家後集（菅原道眞）〕

和漢朗詠集（藤原公任）

新撰朗詠集（藤原基俊）

錦繡段（天隱龍澤）

〔禪林句集（東陽英朝）〕

覆醬集（石川重之）

寬齋先生遺稿（市川世寧）

栗山堂詩集（柴野邦彦）

春草堂詩鈔（賴惟柔）

山陽詩鈔（賴襄）

北溟遺珠（賴三樹三郎）

（昭和四十三年九月二十五日）